

2013年7月7日 礼拝説教(要約)

聖書 ペトロの手紙一 5章8-11節

「目を覚ましていなさい」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

「身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています」(8節)。神の御子イエスの生涯が絶えざる戦いと祈りの日々であったのなら、まして、私たちが主イエスに従って行こうとするときに、戦いなしに、祈ることなしに進むことはできません。ここには、隙あらば襲いかかろうとする罪と悪の巧妙で執拗な力に取り巻かれて生きている私たちに対する勧めが語られています。

「身を慎む」とは、自分自身を律するということですが、元々のギリシア語は、酒に酔っていないという言葉です。酔うというのは、酒に酔うだけではありません。人々の教え、この世の波風、時代の霊にあおられ、流され、フラフラしてはいけないということです。そのためには、動かないもの、変わらないものをしっかりと見ていることが大切なのです。神の言葉によって守られていることが大切なのです。

「目を覚ましていなさい」とありますが、テサロニケー 5:6にも「ほかの人々のように眠っていないで、目をさまし、身を慎んでいましょう」と、やはり身を慎むという言葉と並んで出てきます。「目を覚ましていなさい」という勧めは新約聖書の福音書と使徒の手紙に合わせて20回ほど使われています。多くは、終わりの日、主が再び来られる時を待ち望む姿勢に関して使われています。この世の移りゆくものに目を奪われるのではなく、神のご支配を信じ、神を待ち望むことです。目を覚ますとは、一睡もしないでピリピリと気を張り詰めて過ごすことではありません。主イエスの語られた十人の乙女のたとえの結論は「目を覚ましていなさい」ですが、あそこでは賢かった5人の乙女も居眠りをしています。けれども、彼らは予備の油を用意していたために、主の到来の声を聞くやいなや、すぐに明かりを整えて迎えることができたのです。主を待ち望む信頼と希望の生活の内実が、問われているのではないのでしょうか。

「信仰にしっかり踏みとどまって、悪魔に抵抗しなさい」とあります。「抵抗」というと、非常事態に遭遇し追い詰められてやむなく戦うというイメージがあるかもしれませんが、この「抵抗する」とは立つという言葉からできており、信仰に堅く立つこと、ふだんから立つべき場所に立ち続けることなのです。

こうした信仰の戦いに生きるときに、忘れてはならないことは、「あなたがたと信仰を同じくする兄弟たちも、この世で同じ苦しみに遭っている」という事実です。私たちは誰しも他人のことがよく見え、うらやましく思います。そして、自分だけがどうしてこんなに惨めなのか、弱いのかと嘆くのです。けれども、困難にぶつかり、途方にくれ、自分の弱さを痛切に感じる時も、決して一人ぼっちになって、自分自身の中に閉じこもってしまってはなりません。

カルヴァンは、「悪魔のやり口は、彼がわれわれをキリストの体から離すときに極めて危険なものとなる」と言っています。悪魔はわれわれをキリストの体から離そうとするのです。つまり、教会から、聖徒の交わりから孤立させようとするのです。こんな惨めな戦いをしているのはあなただけですよ、あなたのような苦しみにあっている人は他にはいませんよ、あなたはおかしいのではないか、あなたの信仰はやはりなっていないのではないか、・・・そうやって私たちを兄弟姉妹から引き離すのです。いわば、分断作戦で私たちを揺さぶり、信仰の戦いを挫こうとするのです。

そんな声に惑わされてはなりません。ヘブライ人への手紙 12:1 も言っています、「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷と絡みつく罪とをかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか」。信仰の戦いを戦い抜いて、すでに天の教会へと迎え入れられた多くの信仰の先輩たちがいるのです。

そして、信仰の戦いが孤独なものでないと言うことは、ただ仲間がいるということだけではなく、神ご自身が私たちを堅く支え、私たちと共に戦ってくださるということです。「あらゆる恵みの源である神、すなわち、キリスト・イエスを通してあなたがたを永遠の栄光へ招いてくださった神ご自身が、しばらくの間苦しんだあなたがたを完全なものとし、強め、力づけ、揺らぐことがないようにしてくださいます」(10 節)。私たちは神の御力によって守られているのです。神は、悪魔に抵抗し、罪の力の戦った私たちの救いを完成へと導いてくださいます。私たち自身はいつまでたっても、強くならないかもしれません。しかし、私たちを信仰へと召しだしてくださった神の真実と守りこそが私たちの望みです。

ペトロには苦い思い出がありました。主イエスに、誰がどうであろうと、どんなことがあろうと従い通すと言い張っていた自分が、主イエスがあっけなく捕らえられた後、主イエスを「知らない」と言って、強く否定してしまったことです。しかし、主イエスはペトロがまだ悪魔の力も自分の弱さも本当に知らなかったときから、サタンがペトロを小麦のようにふるいにかけてようとしていると言われ、「しかし、わたしはあなたのために、信仰がなくならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ 22:32) と言っておられました。この祈りにペトロは守られたのです。そして、私たちも守られているのです。主が、このように私たちのために執り成し、祈ってくださいます。これこそ、私たちの力です。だから、身を慎み、目を覚まして、信仰の戦いを続けることができるのです。